

年六十六日香里南泉寺に葬る

榊原香山

榊原香山名長俊字ハ子章一字ハ五陵通称一守江戶乃  
人あり香山と号しおと忠告言とを号せり性讀書を好  
む精力絶その家蔵書頗多し存写の幸と多し文章  
のよき武藝ヲ兼通ぐ甚武芸を好むその製作利害  
此辨今古沿革の攷考究し其説簡とてよくやく  
これより先き年少く伊勢製鞍の法を好む自ら鞍を  
製造すも尤精妙なり古代此名鞍子比すべし其考  
妻鏡ヲ撰し其異本考也其要目の撰あり裨官小説とい  
ても引證考索備ふる事あり著述の才あり刀劔

考甲冑製法辨駁河國志ホの如キ識者多し精確に披せ  
りその餘雜著多し其牧養子息あり其有用子あり  
そのころ此翁信篤進むる武人支遣し其心を疑を  
質すもの多し其志も遂に事業小あり其心を疑を  
り其志ハ識者これに憾とせり其仕の存名声あり其言  
一寛政九年十一月二十二日没す享年六十六歳谷中  
院に葬る

心越禪師

心越禪師名ハ無傳明の浙江金華府婺州浦江翁氏の  
子なり其昌無明禪師此法嗣ありて其母拉也の承禱  
あり其職せしこと明末乃其亂を避るる其邦延宝九

年子授化して存天ね元年江戸子事ノ元禄五年水戸岱  
 宗山天爐吉子恒職とあり同日ノ元禄の八年九月師子迂  
 化すとす小年五十七歳江戸子移るる此故地を捨令とす  
 壽昌山祇園吉と号す禪師をりて開山とせり壽昌の一派  
 吾邦子傳承すると禪師よりせりありうろろ書畫を善  
 く尺書幅あるは高貴もあつんとありその筆蹟の尋常  
 おどろをえりて人おれ風系親被抄ひやぶぐまて七絃琴  
 を彈すると殊小妙手ありむろよりせり七絃琴を  
 たてるといふもその琴譜秘法とも子せりて已子絶  
 たりあるををく禪師此よりふ十六曲せりが邦小つて人  
 ありてよりその傳説を行なれりその人子三つてり

美成云予うろろ書を後進東河翁子学より翁又  
 琴を彈よを好む自拂石老人と号せり予あは  
 翁子三四曲を習ひゆるり今藏すその師翁の遺物  
 少く予子愛敬せりそあり古人琴を以て書  
 室中の雅樂に百も法音居士琴の小對せりて  
 古を談せずんばあるるる若その古色あるもの無  
 き付ハ新あるものとてども亦予子琴ハあるべきと  
 子こそ陶淵明云琴中のおもむきをゆるるときハ何ぞ  
 弦上れ声を勞するとせんとしりてを傳秘月  
 の皎然うろろ子對しりて一二曲を擇美也善性修才  
 此乃志也小外ありすとありて豈いづる子耳

をよりこぞもりの計のこかんやうれハ琴を好め  
る人ハカとよりその風被れ倍くいさきよきこと押ひや  
るゝあまひハ云々昔名を吸るの同尤りあまひを  
破て興を發するをありとも激感あまゝと云  
又云海色東河名ハ彭亨ハ文平東河ハその号あり  
書を東江源禱子學ひそめ兩國格の西ある業研  
場子ト居ゝ書名をめて廿子字えさう文化の老  
免下谷子短めり以書論まゝく言くゝゝゝ舊觀  
を改め一家を成せり家君午谷翁と莫逆の友あり  
きその人をあまし酒とゝゝ極度まで服せりうゝゝ  
押ひをうまゝゝ酒濃の苦を割能く名て関明中と

名づけて友人ふおろり文化十二年予西遊  
ゆゝ以瘡をやそありゝ或人やんとあまき方の州  
鞋を携きゝ水ふろゝ飲ハ瘡を愈すのあまひ  
と云ふ子看護の老とを翁と云ふ不忽然とて云  
ハ履あゝゝと云ふも致子と云ふと古語あも  
いとやや今窮せりこも自安んゝ快とすと云  
里その翁ありてりあふふとと健とく此如終  
子疾いえ同六月廿五日子述せり

壺井雀翁

壺井雀翁名ハ義知通林安左の姓ハ源氏雀翁と号  
す枳州難波の人ありうゝ子師子居任ハ名く書を

積り多きを好む尤吾邦の典なり精々多うくその名一  
時子多し門下百人子あり其撫も念多うく之が古令  
職友彼色おを考へ正しきれば其のそれ賜をうへも  
ふ少くは享保二十年十月廿四日没す享年七十有九  
城東信光百子美なり

美成三門人多田南嶺名ハ義俊通称進蔵あり  
六好信也おく多郡おく左をわたりも指せり指抄の  
久しきく一師子遊學し雀翁の門子たりありは  
も存際ありく一家をおせりとぞり享保九年名  
を政伸と改めその存義俊といふも満泰と名稱  
す桂林高南嶺子ハ別号あり仙譜をもおく

名を男珍といひく半村蕃語とてあうりうり  
著述すもその此書百二年書部とてうりて世に印  
形れりのも念少うり

奴の小万

奴の小万ハ名を雪といひく浪華島乃内ある某鋪本津  
屋五郎多傷う女あり幼より人たて伶俐生後気ありて  
男子子勝れる此操あり十六歳の時侍女お僕を後へ天王  
寺にお入りて下所より口繩板を登りておひり  
より世にすりと喚ぶるひる者二人来りておひり雪女を捕  
と奪ひ去るとせしを雪女すうさげ被う手を捕るとんえ  
がきくおひりめき男どもを左にお投りて柳を發駱く

きもれく初色ぬ是より二孔雪女と世人おびく奴と異名也  
 里奴と云ふの事々々 久保の吟浪華はさうありをなまでと  
 元一六をやく延享五年正月二日あり曲筆竹座の探せ居  
 して客競出入焼く云担云小奴小万と云侠女子と云娘一六  
 実ハ雪女と摸くさるりやれハ雪女が呼ぶ中く言く持不  
 ハ雪女が名をバハとぞ奴の小万と喚りたりや雪女もこれ  
 と自よきとぞ抄のひく侠気ゆき暮りしが文筆も志  
 ありて梁阿祝巖の門子入り又如阿能謀子もこのやれ  
 一柳里蒸と繋りて遂に妻ありぬ雪女つゆくは我  
 系ハ三好修理大夫長慶が裔なりとて遁世の浮ハ三好  
 心慶と自称し難波村子住るお智入くく月光院子細め

て身と重なり子世世を控るるも控俠氣やありん阿の日  
 瑞龍禱もよ大法舎あり一肘急雨もく氣話の春集雨具  
 此傳子くして難波のそりく西芝又尼も子思伝とて長  
 町人人を駛せ筆万本を買りてめ津面の識たふおき老老へ  
 借一わえぬとが文化元年の春七十六歳までがおりぬ  
 残夢和尚  
 残夢如るハ号を宝山と称し誰が嗣承との事とを詳しせ  
 ず永禄年間園東子遊化し常陸北務泉寺子住職たり  
 慈眼大師曰く一付残夢子逢ひて修禪の要旨を説  
 むひて浮常不謂て云吾もく残夢如る子考禪してよ  
 里長生不老乃術をゆり宇都宮ある無務寺の物外

播公ある時残夢子謂く同善往返ありさき常陸國  
 乃民佐村里子毎月六日市の市あり雪日より残夢を見  
 るりのありしがそれ色容負あつて七千歳なるの異  
 比如くとり天正四年三月二十九日此夜病あつて俄  
 子遷化せりあつて又獲生しき草を把りて偈を  
 書く云 隨在無間 五逆聞雷 喝下瞎 脚死眼 豁開  
 とあり一喝一喝して草を擲くそのあつて逝去せり 村子年  
 百三十九歳 顔色軟潤 平生子異あつて此隣里郷黨  
 のものこころしく香華を多向贈礼するこの多しと云り  
 夜雨禪師  
 筑紫の山中子ひり此禪師あり名を裁宗字ハ蘭陵とい

ひり何れのおれ人といふとぞ知れ 特子夜雨を爰く  
 づつ不ても雨よりなるあや毎子香を焚き静坐して曉まで  
 之睡りよつくと此くれば山村の人をいふその名を考へざ  
 せばたが何とあり夜雨わるとを吟る 禪師も亦その号を  
 面白くと抄りひて自ら夜雨禪師と稱しつゝうてその人  
 とありいま山居せざるより先子ハ只何とおき隠者より曾て  
 田方子歴遊し朝野市井をうろこす 内肆搗坊をも嫌を  
 づくの家をももんの怨すもあつて病りともめてさきん  
 りされば人それ故を問ふとあれハ妻及ハ者あり言語をも  
 て述ぶるべしとて入るると云  
 美成云此傳ハ永鳳といふ人の志しつゝ入たるあり



その文子論にて云釋氏の後子隱逸のゆれありて  
 其無上菩提を成ぜんことを欲あり無上菩提既  
 子成すもときハ身といふも無く世といふも無く十方  
 世界が唯一無上菩提ある所ハ何れの所子う隠るる  
 とをせんやこれよりいふもときハ大乘法中子何  
 ら隠るといふとありんあつたあまじと古乃大善知  
 識もたあり山居すもりのなき子あはれ善く方便  
 無量忘化を方それ善の存すもころ抑ひえん  
 へおとある人といふ師ハ二乗獨覺れ得子あはれ  
 ハおさ子風敷の人あはれとて夫路を度教ハ  
 絶つ不易く形を執布子彈すも難く得師の悟

乃ハ世留子ゆり山林子ゆりあき守一これと二乗  
と謂て可あんや况や親七侯の妻と窮め試むる  
を風顛と謂く可あんや誰う師北ん術を窺ひ  
知るものあんやそれ知るまきこそ師乃素  
志あぶられされと果して風教二乗のたきひま柳  
有乃の人子やとらり

又云唐れ白居易の廬山夜雨草菴中といふ句  
あり孫師も白氏と同癖まき夜雨を愛せりまき  
う阿らひハ元れ僧熙晦機の詩子人同万事塞翁  
馬推枕軒中聽雨眠と云句素子も何とおま  
因じんをまきて松雨ふんを澄く寂靜子ふんと

あやふふこそあれ世の幸あぬ人子こそ

古林見直

古林見直をあの名ハ乃芥子正温と改む播州 飭磨  
郡の人ありその先二和申書令具平親まより出たり祖父  
赤松加賀守祐村より矢人函人れ心を易るゆゑを思惟  
く武をすてく医術と形ゆへ人を活さんとをサひく油  
を後く明子入り英夷の乃を學ひ治法往々奇中するごと  
多うその鏡を解きて帰るより及びく西白布 贈るも蜀  
錦をめてやうそれ五珠心を學き目を輝く禁方を織  
里成りて世に傳へる孫儀子その方けり業術の得医乃  
さうん子行たる晩年耕菴と号す父を薨菴奉養と





又宜二孔を診し〜云伏熱あり經云行水志て二孔を溼し生  
中外を和厚とすり冬月子治療す〜としていそぎ槽を造る  
しむ親族あひ集りいりある療治すりあると又宜を待たる  
子不とあ〜又宜事り命〜新汲水とるの槽子溼る〜  
病人と〜衣を解き浴せ〜病人寒慄〜つ衣を  
解んとす耐親族ひさう不冷疾のとれをぬき孔をバ氣  
絶やせんといひあ〜孔は病人も志志〜た〜ふをえ〜見  
宜怒り〜君より母のる食禄をい何とも押のつと〜病  
人ももなまされてすか〜水子入り浴すも不見宜志きり小水  
とるの頂より灌ぎ〜とす耐〜あ〜とや〜と  
よ〜孔と水も〜〜子病人〜牙體此濕和〜〜

水を出るととどおのた〜と〜り程集をあ〜と二十貼む  
うり〜愈める〜と〜り牙體の輕健前子陰〜と〜や。又  
ある候又宜子同〜云凡子の脈を診〜周身の内外言  
凶を知るとと何あ〜子りあ〜と〜り〜又宜言  
い〜説ハ素問雜強子又〜と〜り程を〜壁を〜とい〜子  
脈ハ江戸の如〜才々江戸ハ諸侯のと〜朝宗す〜ふあ孔は  
天下の事を知つきの地あり〜子ハ百脈の大會す〜と〜りか  
ま〜これを〜りて周身は〜ハ知〜る〜き程〜あ〜り〜と〜さ〜へ〜  
され〜りその敏捷大むぬ〜の〜と〜〜と〜紫珍淨蕃和の  
泉南子在〜り〜耐又宜の風采を言〜と〜と〜志志〜りその家子  
顧訪〜と〜溼談〜と〜れ〜りあ〜耐諸侯〜りを信〜と〜西洋